

【資料】

## 明星大学創設の意図と教育理念（1）

——創設前の資料——

【資料1—①】

「明星学苑創立四十周年記念事業趣意書」 1963（昭和38）年2月

明星学苑が、ここ武蔵野の一角に呱呱の声をあげたのは、大正十二年四月であります。本年は創立四十周年の記念すべき年を迎えることになりました。

今日まで歩んで参りました三十九年間を回顧いたしますと、関東大震災、満州事変、支那事変、大東亜戦争と大事件が連続し、しかも最後は無条件降伏による経済難、外交難、思想難におそわれ、社会情勢の混乱と教育制度の大変革など実に多事多難な悪条件の中にありましたが、わが学苑は終始一貫建学の精神を堅持し、基礎教育機関をことごとく備えた総合学園として今日の発展を見るに至りました。

これもひとえに学苑を信じて御子弟を託された御父兄の皆様、ならびに大和協力の精神で御子弟の教育に専心された教職員各位、及び学苑の教育精神を身に体して国家社会のために尽された卒業生諸君及び一般有志各位のみなみならぬ有形無形の御援助御指導、御協力の賜で深く感謝いたしております。

また創立三十五年を契機として昭和三十三年度より諸施設の拡充計画実行に着手いたしました。現在までに学苑本館（男子部高等普通科及び管理部門）、幼稚園々舎、小学校増築（図書室・音楽室・会議室・水洗手洗）、北斗館（男子部中学校及び理科教室）、三省館（女子部高校）、啓明館（男子部高校工業科）及び工業科実習工場など、全学苑を通じ延約千五百坪の新築ならびに増改築を終り、更に昨年七月水泳プール完成など、当初計画の大半を実現することができましたのも施設充実費として御協力いただきましたPTA各位の御尽力の結晶と深く感謝いたしております。

創立以来今日まで地味ではありますが、着々諸施設の改善を図って参った事は以上の通りであります。しかし、まだまだこれで充分とは申し難く、創立四十周年を転機として更に学苑の飛躍的発展と内容諸施設の充実を図って参りたいと存じます。

かねがね御父兄の要望もあります大学施設も具体化させねばなりません。この準備の第一着手としては最少限約二万坪の校地買収の必要もあり、男子部普通科及び工業科の増築、女子部の特別教室増改築、小学校校舍改築、大講堂の新築、体育館の増築、学苑図書館及び食堂の建築、海の学校、山の学校用の施設、校内排水施設等々の施設拡充計画を逐次進めて参る予定でございます。

以上の拡充計画を推進するため、創立四十周年記念事業として別紙要項の学苑債（元金返済、無利息）を発行し、御父兄各位の一層の御協力を仰ぎたいという事が昨年五月十二日の法人役員会において最終決定を見た次第でございます。

つきましては学苑当事者といたしましても諸経費を極力節約いたし所期の目的を達成するよう最善の努力を払いますことは申すまでもありませんが、御父兄各位におかせられても右趣旨御賢察の上、学苑の飛躍的発展充実のため全学苑をあげて御協力と御支援を賜りますよう切に御願ひ申し上げます。

昭和三十八年二月 日

学校法人 明星学苑理事長 児玉 九十

【資料1—②】

「明星学苑債募集要項」 1963(昭和38)年2月

- 一、学苑債は本学苑の施設設備拡充の資金に充てる目的で、法人役員会の決議に基づいて発行するものであります。
- 二、本学苑創立四十周年記念事業の計画は約六億円ですが、学苑教育援助のため無利息にて借用願う訳で、壺口の金額を壺万円とし、生徒一名につき五口以上御負担を願いたいのであります。
- 三、この学苑債の資金は銀行に預金し、これを裏付に逐次借入、事業資金に充当する予定であります。
- 四、学苑債の申込書は入学手続の際にお申込みを致し五月末までの払込を原則と致しますが、御都合により九月末日までの分割払にてもよろしゅうございます。
- 五、学苑債払込方法  
一時払と分割払の二種とし、振込予定日の御指示を願い、御取引銀行より三菱銀行府中支店、富士銀行八王子支店、多摩中央信用金庫府中支店に、銀行所在地外の方は振替貯金で、以上の銀行にお振込を願います。御振込には指定の振込用紙を御使用下さい。
- 六、本学苑債の借入期間は生徒在学期間据置き、本校卒業の際に学苑事務所において元金を御返済致します。但し転、退学者にはその都度御返済致します。
- 七、学苑債券は全額振込後一ヶ月後に書留郵便で御送付致します。  
昭和三十八年二月 日

学校法人 明星学苑

【資料2.】

「明星大学理工学部設立資金募集趣意書」 学校法人明星学苑 1963(昭和38)年5月

明星大学(理工学部)設立趣意書

第二次世界大戦の結果、わが日本はいまだかつて経験した事のない敗戦に遭遇し、一億の日本国民は資源乏しき四つのせまい島で生きて行かねばならぬ運命となりました。私は教育者の立場から、国家再建のため戦後の日本教育を如何にすべきかについて、真剣に考え抜いた結果、戦後の日本教育の根幹は「道德教育と科学技術教育」でなくてはならぬという結論に到達いたしましたのであります。

申し上げるまでもなく、帝国主義の時代は第二次大戦をもって完全に終りを告げ、今まさに世界各国は自国の産業振興に全力を傾け、他国と覇を争わんとする商工業競争中心の時代にはいつております。原料を輸入し、これを加工して、輸出することを産業の中軸とする日本としては、これらの競争に堪え国の繁栄を得んとすれば、高度の科学を中心とした強い道義心と、すぐれた技術によって、よりよき品を製造し、これを安価に売り出す以外に方途はないのであります。したがって、これに適する人材の育成が急務中の急務となっております。昨今人づくり問題が国家の方針としても叫ばれるようになったゆえんも、まさしくこの点からであるといつてよからうと思います。

文部省における中央教育審議会において、工業高校三年と工業短大二年とを結合した五ヶ年一貫の技術教育による中堅技術者養成を企画した専科大学案の立案に私も微力ながら尽力致しましたのもそのためでありましたが、昭和三十三年西独フランクフルトにおける世界教育者会議に出席後の欧米視察において、各国の産業立国と教育との結合の強固さ、特に米国における産学共同(I・A・P又はI・L・P)の徹底的遂行

の実情を見て、いっそう確信を強め、帰朝後準備に着手、昭和三十六年四月から明星高等学校に従来の普通科の他に新しく工業科を併設し、専科大学実現への一步を踏み出しました。ところが、専科大学案は三度も国会に提出せられたにもかかわらず、三回とも審議未了の上ついに廃案となり、明星学苑としては、工業短大・四年制大学のいずれを採るかの二者択一をせまられるに至ったのであります。

一方、四十五年迄の工学部出身者の不足は、現在の日本経済の伸び方をもってすれば約五十万人という統計も発表され、他方、所得倍增政策による所得の伸展は、高校ならびに大学進学者も急増を来して大学入学難はますます激化の一途をたどり、本年高校入学者の卒業する昭和四十一年以後は、現状をもってすれば日本特有現象たる浪人（全学連と浪人は日本の特有現象と世界からいわれています）の激増を見ることは火を見るよりも明らかな事でありますから、明星学苑としても四年制大学実現の急務たることを痛感し、如何なる困難をも克服し、これが実現をはかりたいと決意するに至った次第でございます。

大学出身者の不足は、工科系だけではなく自然科学系全体でありますから、数学・理科専攻者の不足もおびただしく、高校・中学の理数科教師の如きは補充困難のため、学校間で奪い合いといういまわしい状態も頻出しております。そこで明星大学においては、現代工業技術で最も要求されている数学・物理・化学の基礎学科との融合を図る点の考慮と、理数教師の養成との両点から、理科と結合した進み方を採ることとし、明星大学最初の学部としては、

「<sup>(ママ)</sup>物理学科・化学学科・機械工学科・電気工学科・土木工学科」  
の五学科を内容とする理工学部として発足し、時代の要求に応ずる事といたしました。

以上申し上げましたように、戦後の日本教育は道德と科学技術教育を根幹とすべきであるという大前提に源を発しているのでありますから、明星大学は單なる学問技術の練磨をもって満足することなく、「科学する心を持った道義心の強い技術者」の養成を行い、「世界に信頼される日本人」たらしめようという明星学苑建学の根本精神に徹底せんとする「人づくり大学」である事を重ねて強調したいと存じます。

昭和三十八年五月十七日

学校法人 明星学苑  
理事長 児玉 九十

## 明星大学設立計画

開設年月	昭和39年4月
所要資金	資金調達総額 128,100万円
	募金額 50,000万円
	学苑調達資金 78,100万円

## 建設計画

場所	日野市程久保（多摩動物園前丘陵地）
校地費	12万平方米（4万坪） 26,000万円
建築費	55,600万円
機械器具費	38,000万円
図書費	5,500万円
備品費	3,000万円
合計	128,100万円

明星大学設立委員会

会長 明星学苑理事長 児玉 九十

募金委員会

会長 工藤昭四郎

副会長 平山亮太郎 長沢 邦治 杉本 邦雄

顧問会長 平山亮太郎

顧問

青葉 翰於	赤尾 好夫	秋山 雄雅	東 龍太郎	荒木満寿夫	有光 次郎
井口 史郎	井出甲子太郎	井上 定雄	伊藤 静江	伊藤 広雄	伊藤 健雄
石井 満	石川 四郎	石川弥八郎	石塚真太郎	岩崎 喜好	岩淵 辰男
植竹 円次	海野 朝象	海老原兼次	小勝 郷右	小田切 賢	尾形 藤吉
大山幸一郎	岡本 武雄	加藤 武徳	加藤弁三郎	加藤 礼次	鹿島 俊雄
笠原 逸二	神崎 三益	川西 実三	川口巳之吉	河原 春作	木村 義雄
菊地豊三郎	岸 信介	栗田 淳一	熊谷太三郎	熊木 虎蔵	黒沢 清
小島 威彦	小机 武	小林茂一郎	小山 省二	佐藤 栄作	竿代 靖
桜井 三男	迫水 久常	猿渡 盛厚	沢田 隆義	塩月 正雄	重松 宣彦
島内 武彦	鈴木 重信	鈴木 誠一	瀬谷 徹	清家 清	曾我 正史
相馬 和	相馬 雄二	田中 敬吉	高野虎之助	司 忠	寺島 又弥
徳久 克己	中川 以良	中野 喜介	鍋田良次郎	南部 鎮雄	羽田 曄
羽生謙一郎	浜田金太郎	針谷 亀次	樋口 一成	土方 清平	平井 太郎
平山亮太郎	鰐崎 轍	福田 篤泰	藤江忠二郎	藤田 譲次	古田 耕一
古谷 太郎	文伝 正夫	辺田 芳夫	星野 亮勝	本多嘉一郎	前田 忠次
前田 陽吉	松田 武	松田武千代	松永 東	松前 重義	松本 東作
宗像 英二	村上 藤太	村山 義温	森 勝衛	森田 帙男	森部 一
矢部 隆治	安井 謙	山岡 憲一	山口平太夫	吉田松太郎	和達 清夫
若林 卓弥					(五十音順)

免税について

= (略) =

【資料3】

『体験教育』

【資料3—①】

『体験教育』 第260号 1963(昭和38)年11月5日

「四十周年記念号発刊に際して」(抜粋) 児玉 九十

…(略)…この度の四十周年記念事業として本年九月三十日文部省に申請書の提出を完了しました、明星大学の設立については、学校法人役員各位、父兄の皆様方、卒業生諸君及び関係有志各位の並々ならぬ御尽力を賜わり、洵にありがたく、感激感謝の外、言葉もないのでございます。認可を得、開学の上は学苑教職員一同、学苑の伝統たる協力一致を以て、全力を傾倒して設立の精神具現に努力し、記念事業を意義あらしむると共に、各位の一方ならぬ御厚意に対する満腔の感謝といたす覚悟でございますが、各位におかせられ

でも層一層<sup>(ママ)</sup>の御後援、御指導の程重ねて切にお願い申し上げる次第でございます。

#### 「明星大学地鎮祭」

多年の念願でありました明星学苑に大学を設置する計画はいよいよ設立申請を終え、南多摩郡日野町高幡程久保の丘陵(多摩動物公園の南方向い側)四万坪が敷地として決定され、十月二十二日の佳日に午前十時から地鎮祭がとり行われました。

参列者約一〇〇名。降雨にもかかわらず、いとも厳粛に地鎮の神事が終わったが、丘陵から眺望されるあたりの山々や平野は、秋の紅葉が、この日を祝うが如く、秋の野草も参列者のまなこを奪う風情をただよわせていた。

晴れた日には西方に秀麗富士の山もよく見られるとのこと、校舎竣工のあかつきには、風光明媚<sup>(ママ)</sup>の大学として、人の話題になることと想われる。

工事も陽春完成を期され、やがては美しい近代校舎が大自然境の中に誕生するわけである。

#### 【資料3-②】

##### 『体験教育』 第261号 1963(昭和38)年12月15日

「学苑長式辞」(抜粋)(昭和三十八年十一月十日 明星学苑創立四十周年記念式) 児玉 九十  
…(略)…

かくして現在の学苑は敷地二万二千坪、園児、児童、生徒総数三千七百人、教職員百七十余名の大所帯になりましたが、この度四十周年記念事業として宿願の四年制大学を設立することとなり、日野市高幡の多摩動物公園の向側に四万坪の敷地を得、已に認可申請書を文部省に提出し二千二百坪の本館建設に着手いたしておる様な次第で、大学の認可が出ましたならば明年四月からは幼稚園より大学までの総合学苑となる訳でございます。

…(略)…

#### 【資料3-③】

##### 『体験教育』 第262号 1964(昭和39)年1月20日

「年頭の辞」(抜粋) 児玉 九十  
…(略)…

浩宮様御入園、オリンピックの二つは国家全体の事です但明星にはこの外に大学開設の事があります。大学開設の事業も決して明星学苑に限った一私事ではなく、国家興隆民族資質改善を目的とする教育でありますから、大切な国家事業である事は申す迄ありません。明星大学は初めから総合大学にする目的を持っておりますから出来るだけ近い内に文科系の経文学部を置く考えであります。総合大学は一度には出来ませんから、この度の出発には目下国家の最も必要としている理工学部から始める事になりました。理科は物理、化学の二科、工科は機械、電気、土木の三科、合計五科で出発いたします。只今、多摩動物公園向側の四万坪の敷地に建築しているのは二千二百坪の本館で、昨年末に七分通りのコンクリートうちが出来ていますから三月末に完成いたし四月開校に間に合う事は申す迄ありません。続いて本館の東側に、三棟の実験室、実習室の一号、二号、三号の各棟が順に建築の予定になっております。教授陣、機械、図書等の審査は既に支障なく済んでいますから、認可公表もまじかい事と思います。第一次試験は各高校長推せん者から採用する事に教授会で決定しており、目下その書類準備を急いでおります。

この様にして、多年の宿願であった明星大学も愈々四月の新学年に発足し、明星学苑は幼稚園から大学迄の名実備わった一貫教育を行う一大総合学苑となるわけでありますから、今年は明星学苑の歴史に一つの大



きな足跡をのこす年であります。

… (略) …

#### 「明星大学 四月開学準備進捗」

既に衆知の如く、明星学苑に、いよいよ明星大学(総合大学最初は理工学部)ができる。学苑長児玉九十先生の教育理想であった幼稚園より、大学迄の教育機関がこれで全部整うことになるわけで、真の大総合学園が現出することになる。

今年の四月には大発展をとげた大総合学園が巨歩の第一歩をふみ出すわけで、世の注目を集めていることは言うまでもない。

さて、明星大学は

#### 場 所

都下日野市程久保(京王線高幡不動駅下車—新宿より急行約三十分)多摩自然動物園の向側の丘陵地四万坪—現在の学苑の約二倍で富士山や周囲の山々並びに大自然境日野平野が一望にして眺められる風光明眉<sup>(ママ)</sup>のところ。

今年中に、京王線が、すぐ下まで新宿から直通されるので一層、通学に便利となる。

#### 規 模

校舎は完成時までには約六千坪(四階鉄筋コンクリート建四棟)のもので現在は二千二百坪の本館の工事を急ぎ一月二十五日には四階のコンクリート打ちを終り、三月末完成、四月開校に差支ない様工程通り工事が進行している。

#### 学部 学科

明星大学は総合大学で頭初は、国家的見地より先ず理工学部で出発し、いずれ出来だけ近い内に経文学部も新設する予定になっている。

今回の理工学部は学科としては、

物理学科

化学学科

機械工学科

電気工学科

土木工学科

の五科を持つスケールの大きいものである。

#### 教授陣容

何よりも特筆したいのは、稀に見る充実をした教授陣容が整えられたことで、学識、経験ともに世に勝れた教授を迎え得たことであろう。各界著名の先生揃いで明星学苑の大きな誇りであるばかりではなく社会的にも驚きの目をもって見られている所以であろう。

主な教授は次ぎの通りである。

= (略) =

(その他教授・助教授・講師も揃っているが紙面の都合で省略しました。)

【解題】

## 明星大学創設の意図と教育理念（1）

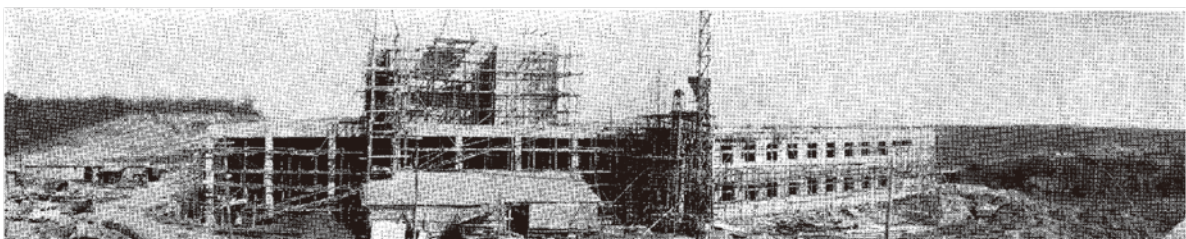
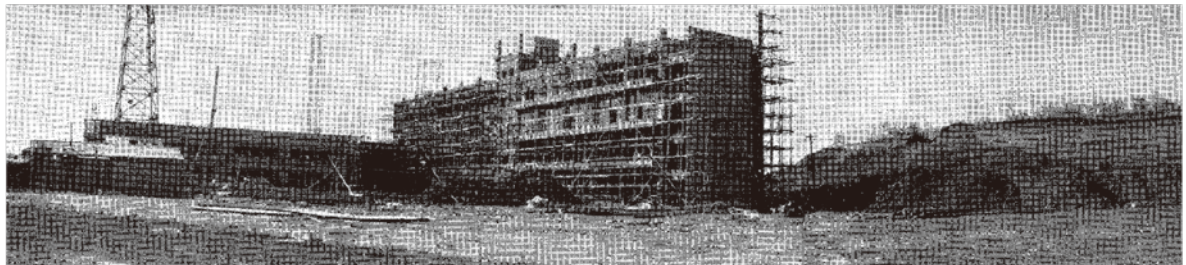
### ——創設前の資料——

#### 解 題

高 島 秀 樹\*

#### 明星大学（理工学部）いよいよ発足

三月初頃散策に出て日野市程久保の丘陵に立った。明星大学校舎が丘陵上に  
(ママ)  
偉風堂々と工事が進められていたが現在は殆んど竣工に近い。（横地先生撮影）



【上】1号館東南側、現在の22号館入口あたりから。右側4階建て部分は現存、左側2階建て部分は撤去され現本館が建設されている。

【中】1号館北側、5号館（旧体育館）あたりから。こちら側は今日の姿と変わりはない。

【下】1号館西側、31号館（Ponte）あたりから、左側エントランス・4階建て部分は現存、右側2階建て部分は撤去され現本館が建設されている。

出典：『体験教育』第264号、1964（昭和39）年4月25日、4～5頁

---

\* 明星大学名誉教授、元人文学部人間社会学科教授・明星教育センター長、教育社会学

## 目次

はじめに

### 1. 掲載資料について

- (1) 「明星学苑創立四十周年記念事業趣意書」・「明星学苑債募集要項」
- (2) 「明星大学理工学部設立資金募集趣意書」
- (3) 『体験教育』

### 2. 明星大学創設の意図と教育理念

- (1) 明星大学創設の意図
- (2) 教育理念

おわりに

## はじめに

明星大学は学校法人明星学苑によって創設され、1964(昭和39)年4月に開学した。

ここでは明星大学明星教育センターが収蔵する明星大学創設に関する資料を紹介し、それによって明星大学創設の経緯をふまえた上で、創設の意図と創設時に掲げられた教育理念を明らかにしていくことを目的とする。本号を出発点としてこの後複数回に分けて紹介していく計画であるが、第1回にあたる本号では明星大学創設以前の資料を取り上げるが、それによって創設時の意図と教育理念を明確にできると考えている。

### 1. 掲載資料について

本号に掲載した資料は次の3種、8点である。

#### (1) 「明星学苑創立四十周年記念事業趣意書」・「明星学苑債募集要項」

第1に取り上げた【資料1-①】「明星学苑創立四十周年記念事業趣意書」はA4版1枚・片面印刷であり、学校法人明星学苑が1923(大正12)年に明星実務学校として創設されてから40年を迎える1963(昭和38)年2月に、学校法人明星学苑理事長児玉九十名で発行された資料である。これまでの学苑の歴史、さらに1958(昭和33)年の創設35周年を記念して実施した諸施設拡充計画について顧みた上で、創設40周年記念事業の計画が示されている。学苑全体の創設40周年記念事業についての紹介であることから、大学創設については「かねがね御父兄の要望もあります大学施設も具体化せねばなりません、この準備の第一着手としては最少限約二万坪の校地買収の必要もあり…(略)…」と、他の記念事業と並んで、きわめて簡単にしか記されていない。しかし、この資料を第1に掲載したのは、現在までに明星大学明星教育センターが収集・所蔵している資料の中で最初に大学創設計画を明記した学校法人明星学苑・理事長名の公的書類、対外的発信であることが理由である。

『明星大学創立五十周年記念誌 I 五十年の歴史』には「…(略)…明星学苑創立40周年記念事業として、明星大学の建学が決定され、工業科の第1期生が入学できる1964(昭和39)年4月を開学の目途とされた。」「新しい大学の創設に先立つ1962(昭和37)年、大学設立計画が決定されると同時に、資金計画が立案された。」<sup>1)</sup>と記載されているが、大学創設を決定した年月日、決定機関に関しては十分明示されていない。本資料では記念事業のために必要な資金調達計画の一つとして「…(略)…創立四十周年記念事業として別



紙要項の学苑債(元金返済、無利息)を発行し、御父兄各位の一層の御協力を仰ぎたいという事が昨年五月十二日の法人役員会において最終決定を見た次第でございます。」と記載されており、遅くとも1957(昭和32)年5月12日までには大学創設が計画決定されていたと推測される。決定主体については、本資料では「法人役員会」と記されており、本来であれば「学校法人理事会・評議員会」ではないかと考えられるが、この表記では不分明であるといわざるを得ない<sup>2</sup>。

この資料に「別紙要項の学苑債」と記されている別紙が第2に掲載した資料【資料1-②】「明星学苑債募集要項」であり、B5版1枚・片面印刷である。この要項「三、」によれば、学苑債の発行によって得た資金を施設設備拡充に直接充当するのではなく、これを銀行に預金し融資を受ける裏付け、信用保証とすることを意図していたと理解される。当時の学苑(幼稚園・小学校・中学校・高等学校)在籍者総数は約3,700人と【資料3-③】に記されているが、その協力状況について『明星大学創立五十周年記念誌 I 五十年の歴史』には「一口1万円と決められた学苑債は、募集の目標額を1億5千万円とし、…(略)…目標額をはるかに上回る2億円近い成果をあげることとなった。」と記され、これによって「…(略)…各銀行は当初貸し出しを渋る傾向であったが、一挙に2億円近い学苑債が集まったことから、学苑の信用度が急上昇し、見通しは明るさを増した。」<sup>3</sup>と記されている。

## (2) 「明星大学理工学部設立資金募集趣意書」

明星大学創設以前の資料の中で、創設の意図や教育理念を明らかにするとともに、創設後の学部学科構成などを具体的に示している資料が【資料2.】「明星大学理工学部設立資金募集趣意書」であり、B5版8頁からなる。本資料に掲載されている兄玉九十「明星大学(理工学部)設立趣意書」は1963(昭和38)年5月17日の日付が記載されているが、表紙には1号館(本館)を西側から撮影した写真が掲載されており、建設工事中と推定されるがかなり完成に近く、4頁に掲載された建設現場の写真も工事がかなり進行した写真であり、1963(昭和38)年9月に校地が決定されたという事情からすると、これらの写真はいずれも1963(昭和38)年5月に撮影されたものではない。そのため本資料の発行年月は不明といわざるを得ないが、明星教育センターが収蔵し、ここに掲載した本資料は、最初に1953(昭和38)年5月に発行された資料に最新の写真を加えるなどをした改訂重版ではないかと解題筆者は推測している。

はじめに、学校法人明星学苑理事長兄玉九十による「明星大学(理工学部)設立趣意書」が掲載されているが、そこでは日本のおかれている状況に対する認識から記述を始め、高度経済成長初期にあたる当時の経済的・社会的状況の下で日本は加工貿易を基本方針とすべきこと、それには科学技術者の養成が急務であることが説かれている。具体的な教育行政に関しては「専科大学」案が提唱され、明星学苑としてはこれに対応することを計画・準備していたにもかかわらず廃案となり、四年制大学の創設にいたったという事情を説明している。教育理念については、「…(略)…戦後の日本教育の根幹は『道徳教育と科学技術教育』でなくてはならぬ…(略)…」、「明星大学は単なる学問技術の練磨をもって満足することなく、『科学する心を持った道義心の強い技術者』の養成を行い、『世界に信頼される日本人』たらしめようとする…(略)…『人づくり大学』である…(略)…」という教育理念を掲げている。

「明星大学設立計画」のうち、「開設年月」と「建設計画」中の「場所」は記載の通り実現しているが、「所要資金」と「建設計画」中の「費用内訳」については、ここに記載されている金額は予算であり、決算金額について確認することは現在のところ解題筆者にはできていない。

設立委員会については会長名の記載のみであるが、募金委員会については会長・副会長・顧問会長のほか顧問として109名の多数が記載されている。この内、会長工藤昭四郎は経済同友会代表幹事、副会長平山亮太郎は野村証券副社長、杉本邦雄は学校法人明星学苑設立時の理事である<sup>4</sup>。顧問には政治家(荒木満寿夫・岸信介=保護者・佐藤栄作・迫水久常・福田篤泰ら)、地方自治体首長(東龍太郎都知事・石川弥八郎福生市長=卒業生・古谷太郎日野市長・本多嘉一郎調布市長・矢部隆治府中市長ら)をはじめ、文化人・研究者

(有光次郎日本芸術院長・猿渡盛厚大國魂神社宮司・島内武彦東大教授＝卒業生・松前重義東海大学総長＝保護者・和達清夫気象庁長官ら)<sup>5</sup>、後に明星大学教授に就任する者(伊藤健雄＝土木工学・小島威彦＝哲学、清家正＝機械工学ら)まで含まれており、各界から多くの多様な人々の賛同を得ていたと理解される。

### (3) 『体験教育』

『体験教育』は学校法人明星学苑の月刊広報紙であり、明星中学校時代の1929(昭和4)年1月1日に創刊され、第二次世界大戦下の1943(昭和18)年10月15日付177号をもって刊行を中断、1956(昭和31)年5月20日付178号から復刊、現在まで刊行が続いている<sup>6</sup>。『体験教育』紙上には、学校法人明星学苑理事長児玉九十の論説や、学校法人明星学苑・各設置校の現況や活動が報じられているが、明星大学の創設について体系的・詳細に記載された例はあまり多くは見当たらない。その中で、明星大学創設に関する内容が記されている記事を紹介したのが【資料3－①】(2点)、【資料3－②】(1点)、【資料3－③】(2点)である。第260号掲載の「四十周年記念号発刊に際して」、第261号掲載の「学苑長式辞」では、いずれも該当の記事の一部として簡単に触れられている程度であり、第262号掲載の「年頭の辞」ではやや詳しく具体的に説明されている。

明星大学創設を主題とする記事としては、第260号掲載の「明星大学地鎮祭」<sup>7</sup>、第262号掲載の「明星大学四月開学準備進捗」の記事が見い出された。「明星大学 四月開学準備進捗」の記事では、発行された1964(昭和39)年1月20日頃の状態をもとに、場所、規模、学部学科、教授陣容について具体的に記載されている。ただし、ここに掲載するにあたって教授陣容については実際に就任した教授氏名を掲載することは差し支えないと考えたが、理由は判明していないが実際には就任しなかった教授が複数含まれていることから掲載を省略した。この記事内容と、解題冒頭に掲載した3点の写真から開催に向けて準備が進んでいる様子について理解することができるのではないかと考えている。

## 2. 明星大学創設の意図と教育理念

### (1) 明星大学創設の意図

明星大学創設の意図と教育理念について、今回掲載した資料の中では、「明星大学(理工学部)設立趣意書」に最も明確に示されている。

本資料では、明星大学創設にいたる経緯が記されているが、そこに大学創設の意図の基礎となる考え方が示されているととらえられる。

明星大学創設の直接的な意図としては、先に本解題1(2)に記したように、第二次世界大戦後の日本の状況をふまえて、日本は加工貿易立国という進路を選択すべきであり、そのためには工業立国を目指して科学技術を振興することと、それに必要な技術者を養成することが教育機関に求められる課題となり、さらに高等教育進学希望者の急速な増大に対応する必要があることから、これらに対応するために大学を創設することが明確に記されている。これが高度経済成長の始期にあたる1960年代前半の日本の経済的状況、社会的状況、さらに政治的状況をふまえた明星大学創設の基本的な意図—外的状況に対応する意図—であったと考えられる。

一方、学校法人明星学苑内の状況に注目するならば、「創立四十周年記念事業趣意書」などに記されているように幼稚園から高等学校を開設している当時の現状に対して、保護者から大学創設を求める声が出ていることも明星大学創設の意図—内的状況に対応する意図—に含まれていたと考えられる。

これらの意図から明星大学創設が計画されたが、おりしも1963(昭和38)年に学校法人明星学苑は創立40周年迎えることから、これを記念する事業となりうることを、大学を創設することによって総合学苑として完成させることも大学創設の意図を後押しするものになったと考えられる。

## (2) 教育理念

明星大学創設時に掲げられた教育理念についても、「明星大学(理工学部)設立趣意書」に最も明確に示されている。

明星大学に限らず、第二次世界大戦後の日本教育の根幹は「道德教育と科学技術教育」でなければならぬという考え方が、学校法人明星学苑と理事長児玉九十の掲げる最も基礎的な教育理念である。これは、20年近い第二次世界大戦後の学校法人明星学苑・各設置校の教育実践の基礎となる教育理念であり、明星大学創設にあたってその教育理念の最も基礎となったと考えられる。

明星大学の創設にあたって掲げられた教育理念は、「単なる学問技術の練磨」をめざすのみではなく、「科学する心を持った道義心の強い技術者養成」を行うこと、それによって、より広く明星学苑の建学の精神である「世界に信頼される日本人を育成」することであった。いいかえるならば、「人づくり大学」をめざすとも記されているが、これはその後も変わることなく、明星大学の教育理念として受け継がれることになる<sup>8</sup>。

## おわりに

1964(昭和39)年度に理工学部1学部5学科で出発した明星大学であるが、創設以前から明らかにされていたように総合大学をめざして1965(昭和40)年度に人文学部3学科(英語英文学、社会学、心理・教育学)を増設、さらに1966(昭和41)年度に人文学部に経済学科を増設、1967(昭和42)年度には通信教育部(人文学部心理・教育学科)を創設した。この学部学科編成は1992(平成4)年度に青梅校(情報学部・日本文化学部)を創設するまで続いた。

本稿に始まる一連の論考では1967(昭和42)年度までを創設期ととらえ、その間の学部学科の増設に対応して明星大学創設の意図と教育理念がどのように変化してきたのか、また変化せずに維持された点があればそれらも含めて資料を検討することを通して明らかにしていくことを次の課題としたい。具体的には学生募集用の『大学案内』、『履修の手引』などを検討材料として取り上げたいと計画している。さらに、大学創設の意図と教育理念が創設後の教育実践の中でどのように具現化しているか明らかにすることも重要な課題となろう。

(2020年11月30日・稿)

## 注

- 1 明星大学50周年史編集委員会編『明星大学創立五十周年記念誌 第1分冊 五十年の歴史』2014年、15／17頁
- 2 明星学苑『明星学苑40年』1963年、には当時の学校法人明星学苑の「法人の役員・評議員」として、理事長、理事7名、監事2名、評議員7名の氏名が記されている。この用語法にしたがえば、理事長・理事が「役員」と慣用的に表記されていたのではないかと考えられ、それにより「理事会」を「役員会」と記したのではないかと考えることができる。
- 3 前出、注1と同、17頁
- 4 副会長長沢邦治は明星高等学校父母の会会長・明星学苑 PTA 連合会会長であることが本稿作成後確認できたが、それ以外は、解題筆者には不明である。杉本邦雄・長沢邦治についてご存知の方があればご教示を得たい。
- 5 ここに記した肩書は該当者の代表的な肩書であり、必ずしも1963(昭和38)年当時の肩書ではない。
- 6 資料「『体験教育』第一号から」、同解題(『明星－明星教育センター研究紀要』第3号、2013年、所収)1～7頁、参照

- 7 「明星大学地鎮祭」記事、「南多摩郡日野町高幡程久保」と記されているが、1958(昭和33)年に合併成立した日野町は1963(昭和38)年に市制を施行しており、これは旧情報にもとづく誤記である。
- 8 2008(平成20)年に明星学苑創立85周年を機に、明星学苑・設置各校の教育理念等を見直し、表現や字句の見直しは行われたが、基本的な教育理念は変わることなく継承されているととらえられる。(『学天の明星—明星学苑創立85周年—』2003年、62～63頁参照)

#### 付記

明星教育センターが収蔵するきわめて多くの資料の中から、本稿に掲載した資料を探索、選択、提供されたのは全て明星教育センター長谷川倫子学芸員の尽力による。明記して、感謝の意を表します。